

# 校長室だより

日本福祉大学附属高校 2016年3月1日

万人の福祉のために

真実と慈愛と献身を



## 卒業式 授与式は厳かに、送る会は感動的に

2月20日(土)第56回卒業式が美浜町長、教育長始め美浜・南知多・武豊町の中学の校長先生や理事長、学園長、学長など学園関係者のご出席をいただき挙行されました。本校の卒業式は二部形式になっており、一部は卒業証書授与などのセレモニー、二部は生徒会企画の「卒業生を送る会」となっています。一部は吹奏楽部の演奏と拍手で卒業生が入場。卒業証書授与・校長式辞・来賓祝辞に続き、代表2名が、決意の言葉を述べました。続いて第二部は、思い出のスライドや2年生全員による合唱、教員による合唱と贈る言葉、そして卒業生による合唱構成詩の発表がありました。



### (校長式辞より) 抜粋

さて、私は皆さんの新たな出発にあたり、言葉を贈りたいと思います。

一つは「だれかのために」という言葉です。昨年ノーベル医学・生理学賞を受賞された大村先生は、感染症を予防するものとなる微生物を発見され、世界の十億人もの人々の命を救う薬を開発されましたが、先生は「何か役に立つことはないかと絶えず考え、人の役に立つことをやりたいと思っていた」と語られています。多くの失敗にもかかわらず、あきらめないで努力されたのは、自分の力を人のために役立てようという強い気持ちがあったからこそではないかと思えます。それは、この学園の創立者である鈴木修学先生が願われたこととまさに共通するものがあると私は思います。言うまでもなく修学先生は、ハンセン病患者や障害を持った子どもたちなど弱い立場にある人々の幸福を願って尽力され「日本の福祉を築いたお坊さん」として知られています。私がよく引用する「誰かのために」という言葉は、創立者の思いが込められています。皆さんはこのような学園の卒業生であることに、誇りを持ってほしいと思います。

二つ目は、「挑戦し続けよう」ということです。これは、始業式や終業式の時にいつも言い続けてきたことです。アインシュタインは、「挫折を経験した事がない者は、何も新しい事に挑戦したことが無いということだ。」という言葉を残しています。若いからこそ挑戦する。未熟さゆえの失敗も、いつかつかむ成功への糧になることでしょう。

三つ目は、「自分の命も他人の命も大切に守ろう」ということです。犠牲者・行方不明を合わせて18000人以上を出した東日本大震災からまもなく5年になろうとしています。自然災害は避けられなくとも、被害を最小限に抑える防災の役割はますます高まっていると言えます。また、最近のスキーバス事故に見られるように、ともすると人の命や安全よりも経済性や効率が優先しがちな社会のありかたにも目を向ける必要があると言えます。

しかしながら、命を脅かす最大の原因はいうまでもなく戦争です。皆さんが修学旅行で訪れた沖縄では4人に1人が犠牲になりました。国の統計では、アジア・太平洋戦争で戦死した日本人が230万人、沖縄戦や東京大空襲や広島・長崎で犠牲になった80万人を含めると、戦争で亡くなった日本人は310万人以上です。何と多くの命が失われたことでしょう。しかし、戦争と自然災害とは犠牲者の数だけでなく、もっと大きな違いがあります。

山田洋次監督の「母と暮らせば」は、終戦直後の長崎を舞台に原爆で亡くなったはずの息子が現れるという映画ですが、山田監督は「原爆が爆発して何人が亡くなったと書かれていますが、・・・誰が落としたのか、主語がない。戦争が起きたというけれど、戦争は主語になりえない。戦争を起こしたのは人間に他ならない。地震や津波と一緒にしてはいけないのです」と語っています。人間が起こしたものであれば、人間の手で解決できるはずとも言えます。皆さんは、自分の命や他の人の命を大切に、戦後がずっと続くように平和を守り、維持し発展させる人であってほしいと思います。

「民主主義に観客席はいらない」とは、最近の若者たちの演説の一説ですが、未来に生きる皆さんだからこそ、一人一人が主体性を持って、考え、生きてもらいたいと思います。今年から十八歳選挙権が実現します。日本の未来を担うのは若い皆さんです。どうか積極的に社会に参画していただきたいと思います。

## 卒業生の言葉

○「保育士になりたい」この思いを胸に私は日本福祉大学付属高校に入学しました。高校生活の3年間では多くのことを学びました。毎年、夏休みには児童養護施設や幼稚園などへワークショップに参加しました。ある幼稚園で、園児全員でカルタをしている時、なかなかとれず見ているだけの子がいました。保育士の方はその子に「大丈夫、次は取れるよ」と声をかけていました。するとその子は少しずつですがカルタを取りにいくようになり、保育士の方のかける言葉も「すごいね、上手だよ」というものにかわっていき、ついにとりことができました。それにより、子どもをほめることで何かに挑戦させる意欲をわかせる事ができるのに気づきました。このような経験から、より保育士になりたいという気持ちが強くなり、日々の勉強に励むようになりました。そして去年の11月、日本福祉大学子ども発達学部保育専修に合格することができました。

親とは違う視点から子どもを豊かに育てることは保育士の仕事でもあります。そのためには専門的な知識を得る必要があります。そこで大学では、基礎の教科はもちろんですが、保育の勉強に力を入れていきたいです。待機児童制度にも関心を持っており、解決するための活動などにも参加していきたいです。また発達障害にも理解を深めていきたいと思います。そうすることで、保育園という集団の中にいる発達障害の子に早く気づき、保護者の力と一緒に対処していくことができるかもしれないからです。日本福祉大学に入学し、多くの人に支えられ夢への大きな一歩を踏み出し前進することができました。大学でもさらに夢に近づくべく努力していきたいと思います。(Hさん)

○3年前の春、真新しい制服に身を包んだ僕は、日本福祉大学付属高校に入学し、目の前に広がる風景に「緑しかない」とつぶやいたことを思い出しました。そして卒業する今日、同じ場所には、僕たちを包み静かに見守ってくれた校舎や、汗と涙と希望がつまったグラウンドがあります。この高校で過ごした3年間は僕にとって大切なことを沢山教えてくれました。

その中で一番印象に残っている事はサッカー部での思い出です。『0-14』これが僕たちの初めての公式戦のスコアです。服装や練習に取り組む姿勢などを振り返ると、これは当然の結果だったと思います。でも僕は1年生の頃は勝ちたいという気持ちよりも楽しくサッカー——がやればよいと思っていた自分がいました。2年生になりサッカーだけでなく、日頃の生活から見直し、勝てるサッカーに変わっていきました。毎日の積み重ねにより、初めて公式戦で勝つことができました。3年生になり、新入生が沢山入ったことにより、部長としての責任が増しました。今までやってきたことをこれまでよりも徹底することを心がけ、大変だったことやきついことも沢山ありましたが、部活の仲間と協力し、知多リーグで優勝をして、最後の入れ替え戦では勝つことができました。

僕は3年生になり代議員を務めました。クラスをまとめることや、片道2時間かけての通学、部活の部長、それらをかけもちすることは決して楽ではなかったのですが、その経験のすべてが人間的に大きく成長させてくれたと思います。

「迷ったらつらい方を選べ」これはサッカー部の顧問の先生の言葉です。僕が進路を決めるとき、浮かんできたのはこの言葉でした。この言葉が3年前には想像もしていなかったような進路へと僕を導いてくれました。ここまで様々な事を続けてこれたのは家族の支えがあったからです。毎朝5時50分に車で送ってもらったことや、きちんと毎日作ってくれたお弁当、自分の生きたかった進路に行かせたくれたこと、色々出したらきりがありません。今まで育ててくれてありがとう。これからもお世話になります。これから僕たちは新しい世界に旅立ちます。きっと迷ったり悩んだりすることもあると思います。その時は、ここ日本福祉大学付属高校で過ごした3年間の糧にし、夢を叶えるために更なる努力を重ね、どんな困難にも立ち向かっていきたいと思います。3年間本当に多くの人に助けていただきました。ありがとうございました。(I君)